

Triangle-1 「附属学校運営部」

東京学芸大学 附属学校運営参事 平井文香

附属養護学校の改修計画では、三者のトライアングルがとても良い関係でした。各々に「木」を用いた空間にしたいという共通の想いがあり、そのなかでも、決して楽しさ・可愛らしさに寄ったカラフルなものにするのではなく、幼稚部～高等部まで共通の落ちついた空間づくりにすることで、長く愛される学校を目指そうという意見が合致しました。

今年度から使用していますが、いくら木材をたくさん使っていても、まだまだ無機質なモノです。これから有機的に評価出来るようにしていきたいですね。モノ同様、建物も使っていくことで“味”が出るものだと思います。計画段階から「メンテナンス」をどうしていくか模索していましたが、それがいよいよ重要になってきます。木の良さはメンテナンスをある程度自分達でできること。技術的なことではありますが、日常の中でカバーできることも多いはず。最終的に「メンテナンス」は、使い手の“心”だと思っています。ちょっとキザ(笑)? 普段の教育の中でも意識し、子ども達の生活の中に、長く持たせたいと思う心、良さをみつけられる心を育てていきたい。今はまだ設備も100%の完成形ではないですが、残りを埋めていながら段々と、自分達の学校をつくっていききたいです。



『村』構想

—東京学芸大学附属養護学校—

東京都東久留米市、黒目川に隣接したところに附属養護学校があります。改修時にイメージした学校のテーマは『村』。周りを木々に囲まれた土地にふさわしい、環境に溶け込んだ校舎を目指したそうです。また附属養護学校では卒業生が学校を訪れる機会も多く、戻った時に安らげるような環境づくりを心掛けています。今回の改修にあたり注意した点は、「用途」「デザイン」「費用」「メンテナンス」「安全性」の5点。養護学校としての用途は必要不可欠で、人間として安全性は大切なこと。また、良い学校環境づくりは、教師にとっても精神的に安定して教育活動に打ち込めるとも重要な要素となってきます
→裏面へ

木活プロジェクト 研究月報

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~w-woods/contact> >>> w-woods@u-gakugei.ac.jp

2004SEP > 04

近年、シックハウス症候群など建材によるトラブルから学校環境が見直され、「木」が再度評価されています。東京学芸大学附属養護学校でも、昨年度の校舎改修工事で「木」の使用を意識した計画が実施されました。改修計画は附属養護学校他、施設マネジメント部、附属学校運営部の三者の連携によるものです。vol.4は、その中の一人、平井文香先生に伺った話をもとにまとめました。

18年前の改修工事 —学芸大学附属小金井小学校—

東京学芸大学の同じ敷地内にある附属小金井小学校は、教室と廊下の天井・壁面・床面に、たくさんの杉板が使われています。昭和61年～62年にかけて行なわれた、校舎大改修の際に貼られたそうです。当時、内装素材として流行っていたビータイルではなく木材が多用されたのは、国内の木材需要を高めるため、間伐材の利用促進があったからではないかと、当時の様子を知る副校長の小林先生は語ります。また、文部省文教施設部から国の政策として、校舎の建築材料として木材を積極的に使用するようとの指示があったそうですが、詳しいことは不明。

杉板は、そのまま貼られているにも関わらず、最初の頃とその装いは変わっていないそうです。今でもとても気持ちの良い香りが漂ってきます。防災上の問題を心配する声もありますが、訪れる人の多くが、その香りと木が持つ雰囲気の良さに好感を抱いています。

昭和62年の学校文集より

4年生の詩

新しい校舎の中に、
ほっとするやさしさがある。
木の香りが、木のぬくもりが、
そっとあたたかくつつんでくれるから。
この幸せを、
このまいつまでも感じていたいから、
そして、感じてほしいから。
だから、おそうじが好き。

4年生の作文

新しい教室に入った時、私は（わあ、きれいな教室。木の香りがしてすてきな教室だなあ。）と私は思った。それに、4年1組のみんなでこの教室で勉強する前に、かわりばんこで掃除したので床がひかっている。「なんかペンションみたいで、かっこいいじゃん。」だれかが言った。私も、そうだなと思った。これからのこのピカピカの教室で勉強する。私はうれしく思った。

取材協力/副校長 小林道正先生 資料提供/平井文香先生



↑昨年卒業した同研究室の竹内さんの卒業制作もある。